
バカとハルヒと召喚獣

takumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとハルヒと召喚獣

【Nコード】

N9987Y

【作者名】

takumi

【あらすじ】

試験召喚システムを採用する文月学園に不思議を求めるSOS団がやってきて……

1章 放課後の出会い／バカとの遭遇／（前書き）

二次創作です。涼宮ハルヒの憂鬱とバカとテストと召喚獣のクロスオーバーになります。

1章 放課後の出会い／バカとの遭遇

「試験召喚^{サモン}」

新緑が生い茂る五月の放課後、僕はいつものように鉄人に雑用を
いいつけられていた。

「さっきも言ったが今日の仕事はここにある木材を校舎裏の廃材置
き場まで運ぶことだ。よし始めろ」

ちっ、えらそうに。もしも願いがかなうなら今すぐ鉄人を殴り倒
して帰りたい。召喚獣よりも強い規格外な鉄人を倒せるはずもなく、
そんなことすれば僕に待っているのは死よりも過酷な運命なのでこ
こはおとなしく従うしかない。

「わかりました」

そして、あと一往復で今日の仕事も終わりだろうかというところ
だった。

「ちよつと見なさいキョン！ 小さい子供が自分の何倍もあるよう
な木材を運んでるわ！」

「な、なんだあれは！」

声が聞こえたほうに目を向けると頭に黄色いリボン付きの力チユ
ーシャをつけた美少女をはじめとする五人組が裏門のほうから僕に
熱烈な視線を向けている。

「ちよつと、何かしらあの子！ 不思議だわ！ 不思議だわ！ 古
泉君、何かしらあれ！」

「申し訳ありません僕にはちよつとわかりません」

「わあかわいいです！」

「……ユニーク」

「おいハルヒ、あまり見るな失礼だろ」

僕の視線に気づいた男子生徒が門に両手をかけショーウィンドウ
を見るような眼をしている力チユーシャの子を制していた。

「あの、なにか？」

ただ見られているというのも気まずかったので五人組に話しかけてみた。

「ああ、いえすみません。ちょっと珍しかったもので」

Fクラスのクラスメイトにはいないような常識人っぽい男子生徒が僕の召喚獣に目を向けながら返してきた。

「これですか？」

「そうよ！ その子一体どうなってるの！？」

「だから失礼だろハルヒ」

「いえいいんです、これは僕の召喚獣ですよ」

『召喚獣？』

五人組うち小さい女の子を除く四人が一様に声をそろえた。

「ここ文月学園はテストの点数で強さが変わる試験召喚システムというものを導入してるんです」

すると背の高い優しそうな男子生徒が反応をみせた。

「試験召喚システムですか……噂には聞いたことがありますね」

「古泉君何か知ってるの？」

「はい、詳しくは知りませんがあちらの彼が先ほど述べたとおりです。召喚獣を召喚して争うことで互いの競争心を刺激し切磋琢磨していこうという制度だったはずですよ」

「ってことはあの小さい子が召喚獣である男の子が召喚者ということ？」

「そのようです」

そこまで話したところでカチューシャの子が満点の笑顔で僕に話しかけてきた。

「あなた名前は！？」

「吉井明久ですけど……あの、あなた達は？」

「これは失礼したわ吉井君！ あたしは涼宮ハルヒ！ で、こっちの背が高い男の子が古泉君、ぼーっとした顔してるのがキョン、この可愛いのがみくる、ちっこいのが有希よ！」

「はあ」

「私たちは北高のSOS団といって世の中の不思議を探しているの、あなたはあたしが今まで見た何よりも不思議だわ！　誇っていいわ！」

「ど、どうも」

可愛い女の子から100%の好意を向けられるというのは照れる。

「ほら、やめるハルヒ吉井君が困ってる。ほんと失礼なやつですみません」

「なによキョン！　あんな不思議を目の前に指をくわえてろっていうわけ！」

どうやら召喚獣に興味があるみたいだ、確かに他の学校の生徒が見る機会はなかなかないだろうし。

「興味があるならこっちに来てみてくださいか？」

そう言うのを待ってましたと言わんばかりに涼宮さんは門を飛び越え召喚獣に駆け寄ってきた。

「わあちっこいし耳としっぽが生えてるわ！」

「ほんとかわいいですう」

「不思議」

「ほう、確かに」

「噂は本当だったんですね」

他の四人も寄ってきて僕の召喚獣にそれぞれの感想を言い合っている。にしてもみくるさんはことなく姫路さんに似てる気が……

「この子名前とかあるんですか？」

みくるさんが僕の召喚獣を胸の前に抱いて……おお幸せの感触が。

「いえ、召喚獣は召喚獣ですからね。自分の分身みたいなものです」

「わっ手が滑りましたあ！」

「いってー！」

頭を押さえてうずくまる僕と召喚獣を皆不思議そうに見ている。

「確かに分身みたいですね」

古泉君、冷静に分析しないでくれ。

「おい吉井、仕事は終わったのか」

ゲツ 鉄人！ もうすぐ終わるとはいえ仕事そっこのけで喋ってたなんてばれた日には自習室に監禁されてしまう。どうするべきか、その木材投げつけても鉄人は死なないだろうなあ。

「むっ 君たちは他校の生徒か、吉井の知り合いか？」

「ああいえ、僕たちはその……」

「こんにちわ、わたしは吉井君の友達の涼宮ハルヒといいます。召喚獣が珍しかったので吉井君に見せてもらっていました」

涼宮さんが僕のガールフレンドに！

「あの！ 召喚獣って文月学園の生徒以外には出せないんですか？」

「おいハルヒ何を言い出すんだお前は！」

「うちの学校でテストを受けなければ召喚獣は出すことはできない。君たちも早いところ帰るんだ」

「私にそのテスト受けさせてください！」

「他校の生徒には受けさせるわけにはいかない」

「涼宮さんと鉄人が「受けさせる」「無理だ」の押し問答をしている。怖いもの知らずだな涼宮さん。」

「待ちな、面白いじゃないか受けさせてやりな」

「ババ……理事長！？」

どこで聞いてたんだろこのババアは。

「しかし理事長」

「いいんだよ、閉鎖的になるより他校と交流することで世間に対するアピールにもなるとあたしは前から思ってたんだ、ちょうどいいじゃないか」

「本当ですか！ 任せてくださいあたしたちがバーンとアピールしてみせます！」

「頼もしいねえ、といっても今日はもう遅い、今週の日曜日にあなたたち五人でまた来なさい」

「吉井、お前のクラスから対戦相手あと四人選んどきな」

そう言い残すとババアはどこかに歩き去った。ここの瞬間文月学園初の対外試合が決定したのだった。

1章 放課後の出会い／バカとの遭遇／（後書き）

原作者の方に最大の敬意を表しつつ全6／7話くらいの予定で送りしていきます。

2章 開戦準備〜文月学園〜

対外試合だと!？」

「うん、そうなんだ昨日北高の人が偶然僕の召喚獣見て自分たちもやってみたって言いだしたところに学園長が来てさ」

「ババアの考えそうなことだぜ、どうせ対外試合で世間にアピールでもしたいんだろ」

「さっすが雄二、学園長もそういつてたよ」

「なんで俺らがそんなめんどくせえ事を……いや、明久、とりあえずババアのところに行くぞ」

「ん？ どうした？ 雄二」

「俺たちはただで協力なんかしねえってことだ交換条件を突きつけに行く」

「悪知恵だけは働くな雄二」

翌日、雄二とそんなやり取りをした僕は学園長の元へ向かった。

「交換条件だと？ まあ大方そう来るとは思ってたが、何が望みだい？」

「さすがババア、話がよくわかるな。俺たちの要求は前回の試召戦争敗戦に伴う戦争禁止期間の無効だ」

「だれがババアだい。また性懲りもなく上位クラスに挑もうつてのかい、まあいいさそれがこのシステムの狙いでもあるからねえ。わかった認めようじゃないか。ただし北高に勝った場合に限るよ」

「OK交渉成立だ。あとはルールの確認だがどうなっている？」

「勝負は五対五で先に三勝したほうの勝ちだ。ただし今回は吉井を含むFクラスの選抜メンバーで戦ってもらうよ」

「なんで僕は決定なんだババア長！」

「だれがババア長だい！ 西村先生に聞いたところお前は昨日のやつらの友達だそうじゃないか。それとも見ず知らずの人間を学校内に招き入れたってのかい？」

ニヤリと薄気味悪い顔でババアが言ってくる。くそ、ババアめ謀ったなつ。

「こっちはもとよりそのつもりだ。科目はどうなってる」

「本来はランダムに決めるところだが戦略も立てられなくてはFクラスのお前たちじゃ北高には勝てないだろう。だから今回は各校二科目を指定で残り一つは当日ランダムで選ぶよ」

「わかったそれでいい」

「ちなみに順番は当日じゃんけんで勝ったほうから先に科目を指定することになる」

「よしわかった。もうここに用はない明久、戻るぞ」

「ちよつとまってよ雄二！ 僕はまだババア長に言いたいことが」

「いいから戻るぞ明久」

「ふふ、精々頑張るんだねえ」

学園長室を後にした僕達は教室に戻り残りのメンバーを決めることにした。

「雄二、あとの三人は誰にする？」

「そうだな、とりあえず姫路とムツツリー二だな、あと一人は……」

「ちよつとちよつと聞いたわよ！ 面白そうじゃないウチもだしなさいよ！」

「美波！？」

「ちようど秀吉か島田で迷ってたところだ。理数系ではお前に分がある。よし、お前が出る」

「やったー！ 数学なら任せなさい！ アキ、足引つ張ったら承知しないわよ！」

「ははっなにいつてるのさ僕に限ってそんなことはあり得ないよ！」

「ほう自信があるのか明久」

「なにいつてんだよ、自信しかないよ！」

「そうかそうか、じゃあ負けたあかつきには屋上紐なしバンジーの刑だからな」

「そんなの余裕さ！……つてええっ！？」

「もう決まったことだ。それとも男に二言があるのか？」

……おのれ雄二め。

「くっ雄二こそ負けたらわかってるな？」

雄二が負けたら霧島さんにあることないこと吹き込んでやろう。

「で、科目はどうすんのさ」

「まずは保健体育だ。これは向こうが指定してくるとは思えないかな。あとは明久、おまえの得意な日本史だ」

「やだなあ雄二そんなに僕に期待してるならはじめからそう言ってくればいいものを」

「勝負の鉄則はいかに弱点をさらけ出さないかだ。おまえはこのチームの穴だ」

そ、そんなにはつきり言わなくても……

「ちよつと坂本、ウチの数学は？ ほかの教科は自信ないわよ」

「相手にはおそらく理系の生徒もいるだろう、だから二つのうちのひとつくらいは理数科目で仕掛けてくるはずだ。そこに島田をぶつける」

「もし選んでこなかったら？」

「あきらめるしかないな。大丈夫だ。こっちはムツツリー二と姫路で二勝は確実だからな」

「はは、美波が負けても僕が勝つから心配ないよ」

「どういう意味よ！ ウチじゃ戦力にならないってわけ！」

み、美波さん、腕が曲がってはいけない方向につ！

「アーツー！」

そんなこんなでこっちの作戦は決まり、あとは当日を待つのみとなった。

3章 開戦準備〜SOS団〜（前書き）

短いですがキヨン視点に映ります。

3章 開戦準備 S O S 団

「面白いことになったわね！ 当然勝ちにいくわよ！」

翌日、文芸部部屋にて『必勝』の腕章をつけた我らが団長様は皆が集まるなりそのたまった。

昨日の放課後「今日はやることないから不思議探しに行くわよ」といきなり言いだしたハルヒ牽きいる我ら S O S 団は、駅から電車に乗りこみ適当な駅で降り途中下車をしたのち、なにも起こり得ない無駄な散策にいそしんでいた。

すると、偶然近くに高校を発見したハルヒは「放課後の学校にこそ不思議は潜むものなの！」とか言いながら文月学園とかいう知らない高校を裏門からジロジロ観察しだした。そこに現れたのが吉井明久とその召喚獣という訳だ。

俺は目を疑ったね。不思議な物はあらかた体験してきた俺でさえ驚いたのだからハルヒが興奮して暴走度五割増しだったのは神様にだって咎めることはできないだろう。

ハルヒは見ず知らずの筋肉教師に「あたしにもやらせろー」としつつこく突っかった結果、俺達 S O S 団は今週の日曜日に文月学園初の対外試合といういささか場違いな舞台に引っ張り出される羽目になったのだった。

「というわけで先方から詳しいルールが届いたわ今から説明するか頭叩き込んで！」

「まずはシステムについて、これは昨日吉井君が言ってた通りテストを受けて点数がそのまま強さに反映されるわ。ただし違いはテストの点数に上限がないってことね」

「上限がない？」

「上限があると頭打ちになって差がつかなくなるかららしいわ」

「なるほど、いわれてみりゃ確かにその通りだ」

「で、今回のルールは五対五の勝負で先に三勝すれば勝ちよ。三勝

と言わず全部勝ちにいくわよ！ 特にキョン、負けたら承知しないからね」

「へいへい」

「最後に対戦する科目、これは向こうとこっちで二つずつ選ぶことになってるわ、残りの一つは当日ランダムで決定よ」

「となるとこの科目選びは重要ですね。確実に勝てるやつを選ばなければなりません」

「そのとおりよ古泉君！ というわけで今から抜き打ちテストをします！ 実力を知らなければ対策は立てられないものね。安心して、問題はあたしが昨日のうちに作ってきたわ」

ハルヒの行動力にいまさら驚くはずもなく、誰一人文句など言わずに俺達は、ハルヒが作ってきたやたら『宇宙人』やら『超能力者』やら『未来人』やらが百鬼夜行するテストに取り組んだのだった。

テストの結果？ その疑問はみんなの心にそっとしまつて墓場まで持つて行ってもらえとありがたい。

ただ一つ、理不尽なテストのこれまた理不尽な採点が終わったその瞬間から、ハルヒのスパルタマンツーマン指導の日々が始まることになったことだけは言っておく。

間章 不思議テスト（前書き）

おまけの章

間章 不思議テスト

【第一問】

問 次の文を読み主人公の気持ちを答えなさい

目をつぶった瞬間、猛烈な吐き気と目眩が襲ってきた。

「目を開けてください」

目を開けるとさっきと同じ場所だった。今は冬のはずなのにやけに暑い。これではまるで夏だ。

「ここは？」

「ここはさっきの時間から三年ほど前の七夕です」

キヨンの答え

なぜおまえが知っている。

ハルヒのコメント

なんのこと？

朝比奈みくるの答え

禁則事項です。

ハルヒのコメント

なんのこと？

吉井明久の答え

はは、何いきなり何を……さ、三年前！？

ハルヒ

つまらないわ

【第二問】

問 宇宙人が使う言語を答えなさい

キヨンの答え

日本語

ハルヒのコメント

ボケるならちゃんとボケなさい

長門有希の答え

情報統合思念体はこの問いに対する回答を拒否することを選択した
ハルヒのコメント

この答えに対するコメントを拒否することを選択するわ

吉井明久の答え

スワヒリ語！

ハルヒのコメント

スワヒリ語は、アフリカ東岸部で国を越えて広く使われている言語です。勉強して出直しましょう。

【第三問】

問

あなたが知っている実在する超能力者の能力を答えなさい。

キヨンの答え

見えない空間的なところに入り込む

ハルヒのコメント

ただの空き巣じゃない！ 真面目に答えないあんたは団長の名のもとに全問題0点の刑に処するわっ！

古泉一樹の答え

全身を光で包み空を飛び、相手を攻撃します
ハルヒのコメント

どこにいるのかしら！ 今度会わせて！

吉井明久の答え

骨を折られても即座に再生する。もしくは目をつぶされても視界が戻る。

ハルヒのコメント

レベル4の肉体再生 オートリバーす ってところかしら、ぜひ会ってみたいわ

間章 不思議テスト（後書き）

次はメインパートです。

4章 開戦、赤髪の悪魔が生まれた日

日曜日。文月学園には休みだというのに多くの人が訪れていた。

「おい、ババアなんでこんなに人がいるんだ？」

「対外試合を無観客にしてどうすんのさ。だから今日は特別に一般にも開放するんだよ」

「にしても男子が多いね雄二」

「大方北高の女子を見に来たんだろう」

客席最前列はやっぱりFクラス男子が陣取っている。「おい、北高生レベル高いぞ！」「まじだ！あの力チューシャの子とお近づきになりたいぜ！」「俺はあっちのおとなしそうな子が！」「胸がでかい子一択！」

……目が怖いよお前ら。みくるさん泣きそうじゃないか。

「吉井君！今日はよろしくー！」

涼宮さんがステージの反対側から僕に手を振っている。やっぱりかわいいなあ。

「会長！どうやら吉井はあの力チューシャ娘と知り合いのようですねあります！」

「なんだと！うらやま……けしからん！やつを即刻とらえ異端審問会を開催するー！」

「こーろーせー！こーろーせー！」

『異端者は許すなー！』

……後ろがもつと騒がしくなったな。振り向かないようにしよう。「静かにしな！みつともないねえ一般公開なんだからおとなしくしてな！えーこれより特別親善試合として文月学園対県立北高校の試合を開催する。代表者はステージに上がり科目を指定する順番を決めるように」

ちなみに互いが指定した科目及びランダムで決められた科目もすでに発表済みで、すでに全科目の試験を終えている。だからここで

はその対決の順番を決めるだけ。こっちは僕、向こうは涼宮さんみたいだ。

「待て明久」

「なに？ 雄二」

「この勝負は先に三勝したほうが勝ちだ」

「？？ わかってるよそんなこと」

「つまり先手を取りこつちに有利な科目をぶつけ勝ち星を先行することによって相手にプレッシャーをかけられる。だから勝て、明久」
「わかった、まかせて」

ステージに上がり涼宮さんと対峙する。かわいいなー

「こらーアキ！ 鼻の下伸ばしてんじゃないわよぶっ飛ばすわよ！」

「……あーきーひーさーくん？」

せ、背中に姫路さんと美波の負のオーラが！

「吉井君、あなたたちはとても不思議で興味深いわ」

「どうも」

「私たちが勝ったらSOS団文月学園支部として私の傘下に入りなさい！」

「えー！ そ、それは無理だと思うなあ」

「おい明久！ 無駄な要求はのむなよ」

「受けるの受けないの？ 優柔不断な男はみつともないわよ」

「受けようじゃないか」

「こら明久！ ふざけんな！」

なんか外野がやかましいな。右の靴をつま先にかけてつと、ゆつくりと声の聞こえる方向を向いてつと

「あ、足が滑った」

全力で振りぬいた。……よし、おとなしくなったな。

「僕達が勝ったら？」

「なんでもいいわよ、こっちが負けるなんてありえないわ！」

自信満々だな。なんでも？ ということは……

「……ふふ」

「こらアキ！ なにニヤニヤしてんのよぶっ殺すわよ！」

「……あーきーひーさーくん？」

……五体満足で勝負に挑めるかな？

じゃんけんは僕が制した。当然先攻（というより先に科目を指定する権利）を選ぶ。

「勝ったよ雄二……ってなんでこいつ僕の靴顔に乗せてひっくり返ってんの？」

「……明久終わったら覚えてろよ」

なんでだろう味方のはずなのに敵だらけだ。

「とりあえず一試合目だが、科目は保健体育、選手はムツツリー二でいく」

「あれ、ムツツリー二がいないよ？」

「……カシャ……カシャカシャ……」

「きやつ、や、やめてください！」

あ、いた。みくるさんを被写体に好き勝手やってる。すでに鼻血の量が尋常じゃないけど大丈夫かなあれ。

「戻れムツツリー二、試合だ」

「……まかせろ」

「初っ端は負けらんないわね、有希お願い」

「……問題ない」

向こうは有希さんか、頭良さそうだなーでも保健体育でムツツリー二の右に出る者はいないだろう。まずは一勝だ。

立会教師の鉄人がステージに立つなり合図を出した。

「開始っ」

「……試験召喚^{サモン}」

ステージにバンパイアの召喚獣が召喚された。点数は550点。

さすがムツツリー二。

「……試験召喚^{サモン}」

今度は有希さんの召喚獣が召喚される。……なにあれ、リボルバ

ー？ 銃もった召喚獣とか初めて見た。点数は……2000点！？

「ただけエロいんだよ!!」

「おい、ババア! なんだあの点数は! またバグっただろ!」

「……いや、真正銘あの子の点数だよ」

「2000点とか聞いたこともないぞ」

『おとなしそうに見えてエロい……だと!?』『俺にも保健体育教えてくれー!』

場内も前代未聞の点数を見て大きな盛り上がりを見せている。…

…おもにFクラス男子が。というより保健体育できるからってエロいと決めつけるのも失礼なような。「ただけエロいんだよ!!」とか言った僕に言えたことじゃないけど。

「……くっ加速」

有希さんの点数を見てからムツツリー二の鼻血が止まらない。さてはムツツリー二も同じことを考えてたな。

「……」

……ドサッ

「そこまで! 勝者県立北高校」

……え、あのムツツリー二が一発で負けた……? 信じられない、有希さんの召喚獣は腕輪で加速したムツツリー二の召喚獣を片手で捕まえゼロ距離でその引き金を引いた。戦力差故のバグかわからないが、かわいらしい召喚獣から血飛沫が飛ぶというのはなかなかショッキングな場面だった。相手が僕なら冗談じゃなく死んでたな

……

「……勝った」

「さっすが有希! 頼りになるわ!」

「……負けた」

「まあ気にするなムツツリー二、相手が悪すぎた」

「さあつぎはこっちの番ね! 科目は化学、選手は古泉君よ!」

「……あの生徒は特進クラスらしい」

「なんだと? もう負けられん、頼んだぞ姫路」

「任せてください! 土屋君の分を取り返します」

「開始っ」

「いきます！ 試験召喚！^{サモン}」

「負けません。試験召喚^{サモン}」

姫路（450点）vs 古泉（403点）

「よしっ点じゃ勝ってる！ 瑞希いけるわよ！」

「でも400点を超えてくるとはさすが特進クラスだね。イケメンのくせに秀才とは！ 天は二物を与えたかつ」

「一物も与えられなかったやつが騒がしいな」

「どういう意味だよ雄二！」

「安心しろ、そのままの意味だ」

ステージに目を向けると戦いは終盤だった。古泉君も頑張ったけどやはり姫路さんには敵わなかったみたいだ。

「もうすこしでしたね」

ニコリと笑った姫路さんはそのまま古泉君にとどめを刺した。

「そこまで！ 勝者文月学園」

「申し訳ありません」

「まだイーブンよ気にすることはないわ」

「明久君！ 勝ちました！」

「うん、さすが姫路さんだよ！」

「何とか首の皮一枚つながったな。さすがに一筋縄じゃいかない」

「残ってる相手みんな頭良さそうだもんね」

「そうだな。次はうちの番だ。科目は日本史だ」

「ふふ、ついに文月学園の秘密兵器と称される僕の番か、待ちわびたよ」

「五本勝負のしかも同点で迎えた三戦目の持つ意味はわかるな？ ここで負ければ実質うちの負けと思ってい」

「二敗になると一気に苦しくなるもんね。任せといて。それでも今日のために詰め込んできてるから」

「よし、行ってこい！」

「吉井君頑張ってください！」

「アキ、勝ちなさいよ！」

「向こうは吉井君ね、うちはキヨン、あんたよ」

「この大事な場面で俺か!？」

「ふふ、涼宮さんはそれほどあなたに期待しているってことです」

「だまれ古泉、はあ仕方ねえ」

向こうはキヨン君か、ここは男として負けられない。そして涼宮さんにあんなことやこんなことやそんなことを！

「ふふっ」

「こらアキ！」

まったく、美波はめざといなあ

「負けないよ、キヨン君」

「俺も負けたら団長様の雷が待ってるんでな。悪いが勝たせてもらう」

「開始！」

サモン
「試験召喚！」

サモン
「試験召喚」

吉井（150点）vsキヨン（220点）

「よしキヨン！ やっちゃいなさい！」

「明久君大丈夫でしょうか？」

「明久は召喚獣の扱いだけはうまいし今回の点数もなかなかだ。あいつなら勝てるだろう」

くそっあれだけ詰め込んだのにまだ勝てないのか。雄二と余計なやり取りしたせいで記憶からこぼれたんだ！ 負けたら雄二のせいだ！

「悪いが負けてもらうぞ」

キヨン君の召喚獣が繰り出してきたランスを僕の召喚獣は後ろに飛んで交わす。すかさず僕は木刀で突きを繰り出した。

「よしいけるわよアキ」

「こらキヨン！ そんなの超能力でかわしなさいよ！」

「……無茶言うな」

「今度はこっちの番だ！」

僕は召喚獣に上段の構えをとらせそのまま一閃。相手の頭に見事に決まった。この攻撃で相手の点を50点にまで減らす。

「明久君あと一息です！」

「いつけー!!」

相手に反撃する隙も与えず下段からの切り上げが命中し点数をゼロにした。

「そこまで！ 勝者文月学園」

戻った僕を迎えたのはチームメイトのあたたかい声だった。

「よくやったぞ明久、お前にしちやめずらしく危なげない戦いだっ
たな」

「すごいわアキ！」

「明久君かつこいいです！」

ふはは、もつとあがめよ！ この僕を！

「それよりアキ、なんか始まるまえニヤニヤしてたわね。何考えてたのよ」

美波さん、顔が怖いです。

「む、武者ぶるいつてやつだよ。ははは」

「ふーん、ま、ちゃんと勝ったし今回は見逃すわ」

ふうあぶないあぶないでもなんで毎回美波は怒るんだろう。

「この、バカキョン！ あんた罰金ね」

「……悪い」

「まったく、まあいいわこの団長様が直々に部下の尻拭いをしてきてあげる」

「ええっわたしが最後ですか!？」

「そうよ、みくるちゃんは上級生だものね」

「そ、そんなあ」

「大丈夫みくるちゃんなら勝てるわ。ここはばっちり勝ってみる
ちゃんにまわすわ！」

「頑張つて……ください」

「さあ次はあたしよ！ 科目は数学！ 相手は誰！」

「行って来い島田」

「まかせて、相手はウチよ！」

「てつきり涼宮さんは最後だと思ったんだけどな」

「ここを出てくるってことはよほど数学が得意なんだろう。当たり前だが油断できん」

「なんでうちは雄二が最後なの？ バカなのに」

「お前に言われたかねえよ！ ほんとには二戦目の予定だったんだがムツリーニがやられたからな。相手も特進クラスだったし姫路でいくしかなかった。まあ残りの一つが俺の得意科目だったってのもある」

「そういうことか。にしても美波と涼宮さんか、なんか見ててヒヤヒヤするよ」

ステージでは早くも二人が火花を散らしている。

「あたしが負けることはないわ！」

「私だって数学には自信があるんだからね！」

「開始！」

「試験召喚！」
サモン

「試験召喚！」
サモン

美波（210点）vs ハルヒ（500点）

「なに！？」

美波の点数は決して低くない。にしてもあの点数……だてにリードーではないってことか。

「見なさいキョン！ あたしの召喚獣めっちゃ強そうよ！」

「さすがハルヒだ。お前にはかなわんよ」

確かに強そうだな……見た目は一言で言うと爆弾魔 ボマー だけど。

「くらいなさい！」

涼宮さんの召喚獣が次々に爆弾を投げつけ、それを寸前で何とか回避する美波。しかし圧倒的な戦力差を前に攻撃には移れない。

そのとき涼宮さんの召喚獣の腕輪が光り、掲げた両手に超大型爆弾が出現する。

「なにっ腕輪の能力を使いこなしてるだと!？」

「あたしに不可能はないの! 一戦目でこの腕輪の特性は見破ったわ!」

さすがだ。あのグループのまとめ役ならそれぐらいできてもおかしくない。

「おいハルヒ、なぜそれを先に言わなかった!」

「あんたの召喚獣には腕輪なかったじゃない。多分一定の点を越えなきゃ出ないのよコレ、平団員ごときが使えるものじゃないわ! 勉強して出直しなさい!」

確かにその通りだ。腕輪は400点を超えると出る。にしても散々な言われようだな。キョン君がすこしかわいそうだ。

「じゃあそろそろ終わらせるわよ! 吹っ飛びなさい!」

そう言うつと涼宮さんの召喚獣は逃げ場のないほどこでかい爆弾を投げつけ、美波の召喚獣は一撃で爆散した。

「そこまで! 勝者県立北高校」

これで同点。予想外の接戦に会場のボルテージも最高潮だ。

「これがあたしの実力よ!」

「お前らしい派手な決着だったな。まったく、お前の規格外っぷりには頭が下がるぜ」

「さすがは団長様ですね。おみせしました」

「うう、次は私ですか」

「そうよみるちゃん。この流れでバーンと勝つわよ!」

「……はい」

「ごめん、負けたわ」

「仕方ないよ美波、涼宮さん強かったし」

「……やっぱりアキは強い子のが好きなの?」

「え、なに? 美波」

「な、なんでもないわよ！」

バンッ

いってー！ 肩外れた！ …… カキン。これでよしと。

「じゃあ最後は雄二だね」

「ああ相手はここまで総じてレベルが高いからな。いくら得意科目でも勝てるかどうか……」

雄二の珍しい弱音を受け、僕達の後方から声が聞こえた。

「雄二…… 負けたら結婚、勝っても結婚」

「しょ、翔子！？」

後ろを見やるとさっきまでやかましかったFクラス男子を蹴散らし、霧島さんが観客席の最前列に陣取っている。

「女子に負けるみつともない雄二はさっさと結婚して私に守られるべき……」

「なぜそうなる！ 勝ちやあいんだろ！？」

「女子を公然の前で痛めつける雄二は私と結婚してひっそりと山奥に暮らすべき……」

「戦いだから仕方ねえだろ！ 結婚なんかしないからな！」

「もう私のおなかにはしょうゆがいるのに……」

「もうそのくだりはいい！」

いつも通り息のあった夫婦漫才を啞然と見ていた相手チームが声をかけてきた。

「ほーらいつまでやってんの！？ こっちの準備はできてるわ！」

「翔子！ 話はあとだ！ じゃあ行ってくる」

「負けんなよ雄二！」

「ああ任せろ！」

みくるさんの実力はわからないけど科目が現国な以上雄二にも勝ち目はあるはずだ。

「開始！」

「試験召喚！」

「えっと、さ、試験召喚！」

雄二（90点）vsみくる（300点）

「つておい！ 何やってんだよバカ！」

「仕方ねえだろ！ 昨日は翔子に監禁されて一睡もできなかったんだ！」

「うるさいバカ！ だいたいなんで雄二の召喚獣は武器持ってないんだよ！ 低スペックすぎるだろ！」

「それは今関係ないだろ！？」

「い、いきます！ えいつ」

スカッ

「えいつ」

スカッ

うわー全然当たってねー二発目なんか真後ろ攻撃してたし。これもしかして勝てるんじゃ。

「召喚獣の扱いが苦手みたいだなあ！」

「あつちやーみくるちゃんこういうの苦手そうだもんね失念してたわ」

これを好機と見た雄二の召喚獣がみくるさんのかわいらしい召喚獣を押し倒し、いかがわしい絵面になっている。

『……雄二、許さない』

……後ろからの殺気が半端ないんですけど。それに気付かず雄二は「ふははははー」と悪の大王みたいに笑いながら、みくるさんの召喚獣をマウントポジションで殴り続けている。な、なんて猟奇的な画なんだ。これには皆ドン引き。会場は誰ひとり残らず白い目で雄二を見ている。もう本当に霧島さんと結婚して山奥でひっそり暮らすべきだと思う。

だんだんと点差はなくなっっていく最後は召喚獣の髪をつかんで地面に頭を叩きつけるという雄二の外道な内面を余すことなく発揮した終戦となった。

「そ、そこまで。勝者文月学園……」

さすがの鉄人も自分の生徒があまりにもアレなので恥ずかしかつ

たのдарう。最後のほうは声が聞こえなかった。

「ふはは見たか！」

「……………雄二、周りを見てごらん」

「ははは……………おい、お前ら何だその目は！？」

「自分の胸に手を当ててよく考えるんだ」

「……………ごめんなさい」

「仕方ないわよみくるちゃん。それにしてもあの坂本ってのは外道ね。団長の名のもとに制裁が必要だわ！」

「どうやらその必要はないみたいだぞハルヒ」

気づいたら霧島さんが隣に来ていた。かなりご立腹のようだ。

「……………雄二、話がある」

「どうだ翔子！ 勝ったから結婚はなしだぞ」

そんなこととは気づかない雄二は上機嫌で別の方向を見ている。

「……………雄二」

「だからなんだ翔……………ばっバカな、戦闘力250億だと！？」

その後雄二は気を失うまでマウントポジションで殴られ続けている。ご愁傷さま。

イベント終了後、涼宮さんが僕の元までやってきた。

「最後はちよつとあれだったけど楽しかったわ！」

「はは、最後のはね……………ほんとごめん。みくるさんにも謝つといてくれるかな？」

「大丈夫よ。みくるちゃんはそんなの気にしないわ」

「そうだ、僕達が勝ったってことはなんでも言うこと聞いてくれるんだよね？」

「……………そうだったわね、勝つと思ってたから忘れてたわ。でもこのあたしに限って二言はないわ！ 何でも言いなさい！」

ふむ。どんなエロい事をさせようか。うーん。

僕が一生懸命最高のシチュエーションを考えていたら美波がこっ

ちに気付いたみたいだ。くそっ早くしなくては。

「あ、涼宮さんだ！」

「あなたはあたしと戦った……」

「島田美波よ！ 美波でいいわ！」

「わかったわ美波。あたしのこともハルヒって呼んで頂戴！」

「ハルヒはアキと何話してたの？」

「こちらが負けたからそっちのいうこと何でも聞くって話よ」

「……アキ、どうせロクなこと考えてなかったでしょ。ハルヒかわいいものねえ！？」

なぜ腕をつかむ！？

「痛い！ 痛いよ美波！ そんなわけないじゃないか！」

「どうだか」

なんとか放してもらえた。しかし美波が目を光らせてるこの状況下ではエロいお願いなんて言えるわけがない。チクシヨウ！

「じゃあさハルヒ、そのお願いで私と友達にならない？ なんだか波長が合いそうなのよね」

なんだと！？ 僕の夢があ……

「そんなことでいいならお安いご用よ！ 美波をSOS団外部団員として迎えるわ！」

「おい、帰るぞハルヒ」

「あ、もう行かなきゃ。じゃあまたね美波、吉井君！」

「またねー」

「うん、バイバイ涼宮さん」

そんなわけで文月学園初の対外試合は三対二で文月学園の勝利に終わった。そして、観客総ドン引きな試合を繰り広げた雄二はこれを機に『赤髪の悪魔^{せきはつ デビル}』と称されることになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9987y/>

バカとハルヒと召喚獣

2011年12月2日16時45分発行